

編集後記

議事録のページにもありますが、今年度は I-LISS の大会が 2 回ありました。

まずはインドで行われた第 6 回大会で、大城善盛氏が日本からオンラインで発表なさり、私もその場に同席できました。大城氏の発表は無事終わった(と思われる)のですが、次の発表者は、おそらくインド側のインターネットの回線の問題で、もう一度発表なさる羽目になっていました。

その 1 週間後には、韓国で第 5 回の大会が行われ、孫誌銜氏が現地で発表なさいました。私はこちらもオンラインで参加できました。参加者からの「なぜ日本ではランガナタンはそれほど人気なのか」の質問に対して、孫氏がその場で答えるのは無理というものですが、聞いていた私は言葉の問題もあり、ただ見守ることしかできませんでした。これに対する回答は今号の志保田氏の原稿に書かれています。

12 月 10 日には、I-LISS Japan の大会が筆者の勤務する相愛大学で行われました。ただ、インターネットの状態が悪く、オンラインで参加できない方は何人もいらっしゃったでしょうし、I-LISS の呉(Oh) 会長のご挨拶も会場に來た方々にうまく伝えることができませんでした。皆様にはご迷惑をおかけし申し訳ありません。そのような中、皆様からは様々な協力を頂きありがとうございました。

転んでもただでは起きないと言いますか、コロナとなって世界中のさまざまな研究会に気軽に参加できるようになったことを活かすしかありません。また、zoom を始めとして、音声自動認識によって、字幕が出せるようになっています。

先日は ALA (American Library Association) が主催する “Addressing Challenges in America’s School Libraries” の第 1 回に参加しました。わいせつと判断された本を生徒に貸し出したスクールライブラリアンを罪とする法案がさまざまな州で提出されていることがテーマでした。現場のスクールライブラリアンによる「州の学校図書館の協会ではロビイストを雇えないが、州の図書館協会にはロビイストがいて、誰が情報を持っていて、誰に働きかければいいのか教えてくれる」「私の州はとても赤い州(共和党を支持する傾向がある州)で、教育委員会が定めたことがきちんと行われているか、多額の資金を費やして監視し続ける必要がある」「州の学校図書館協会の会長として、すべての州議員に名刺を渡している」など、なんとなくそうだろうと思っていたことが実際にあることだと分かっていきます。

ただ、私のような英語が苦手な者でも内容が把握できるのは、字幕がテキストデータとしてダウンロードでき、それを翻訳サイトにかけられるからです。今年中にでも zoom の機能が進化し、YouTube のように、字幕が自動翻訳され、日本語で画面に出るようになるのではと予想しています。

その次の日は、ALISE (Association for Library and Information Science Education) による “Student-Centered Instruction and Autistic LIS Students” を受けました。自閉傾向の学生に関しては私も考えるところがあります。ただ、こちらは字幕は出せるものの、著作権の関係からか字幕がダウンロードできる設定にはなっておらず、私は大まかな内容は分かるものの、十分に理解することはできませんでした。ああ、私は一生英語を理解することはできないんだろうな、と思う瞬間です。

(編集次長 岡田大輔)